

人間教祖論の現在

—金光教学における教祖関連資料と教祖理解—

長崎 誠人

要旨

金光教学は、教学的に教祖を一人の人間として共感的に理解しようとする人間教祖論の立場から赤沢文治の内面生活について豊かな成果を出してきた。しかし、それについては、生神思想すなわち教祖が神に選ばれた唯一の媒介者であるという観念の希薄化をもたらし、救済の観念が曖昧になっているという厳しい指摘がかつて行われた。本稿では、そのような指摘以後の資料環境の変化、とりわけ2015年に教団に教祖関連資料が提供されて以後の人間教祖論の動向について検討する。そこでは、かつて人間教祖論の焦点となってきた「四十二歳の大患」から「神の頼みはじめ」への焦点の移動が顕著となっている。この焦点の移動により、教祖理解・教祖像にどのような変化がもたらされているのかを近年の教学研究の検討を通して究明する。

このような問題の究明は、21世紀において低迷が指摘されている「救済宗教」、「教団」としての金光教がどのような課題に取り組み、またどのような困難を抱えているのかを明らかにすることにもなるであろう。

キーワード：金光教、生神思想、人間教祖論、四十二歳の大患、神の頼みはじめ

はじめに

2015（平成27）年、金光教団に教祖直筆の帳面を含む種々の資料が提供された。それ以来、金光教教学研究所において資料の解説等の基礎的な研究が進められ、資料の一部は立教160年にあわせて2019（平成31）年に『金光大神事蹟に関する研究資料（影印、読み下し文）』として公刊された。

これらの新たな教祖関連資料により、赤沢文治ⁱのこれまで知られていなかった事蹟等が明らかになってきている。従来日本の新宗教全般において、また金光教においても教祖研究が盛んに行われてきたが、金光教においては新たな教祖関連資料によりそれがさらに活発になり、金光教学からは教祖に関する新たな注目すべき研究成果が毎年発表されてきている。

教祖直筆の帳面を含む教祖関連資料は、金光教の教祖理解・教祖像にどのような変化・影響をもたらしたのだろうか、また今後もたらすのだろうか。そのような問題意識からは、金光教団に教祖関連資料が提供された2015年前後から今日までの教学研究の動向として、次の二つの点が注目される。一つは、安政六年の「立教神伝」ⁱⁱにいたるまでの文治と神との関わりを理解する際、従来大きな意義が認められてきた安政二年の「四十二歳の大患」ⁱⁱⁱの事蹟に加えて、安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟に大きな意義を認める、あるいは「四十二歳の大患」の事蹟よりも、むしろ「神の頼みはじめ」の事蹟の方により大きな意義を認めようとする傾向が顕著になっている点である。もう一つは、明治六年に神名が確定されたと考えられてきた金光教の主神である天地金乃神ではなく、民俗信仰の金神と赤沢文治との関わりはどのようなものであったのかという問題関心が高まっている点である。

この二点のうち、本稿では特に「四十二歳の大患」の事蹟に加えて、あるいはそれよりもむしろ「神の頼みはじめ」の事蹟に大きな意義を認めようとする傾向の高まりが、教祖理解・教祖像という観点から見るととき何を意味しているのかという問題について論じることとする。

このような問題関心から、金光教学の教祖研究についての先行研究としては、宗教学者の島蘭進と、宗教学者で金光教教師でも

あった荒木美智雄の研究を挙げておきたい^{iv}。議論の詳細は第二章にゆずるが、島蘭は戦後の金光教学において教祖を一人の人間として理解する人間教祖論が優勢になり、生神思想が希薄化していくことにより、救済の観念が明瞭でなくなるという重大な困難に直面していることを指摘している。

また、荒木は、1983（昭和58）年に『お知らせ事覚帳』が教典に収められて公開されるのにあわせて次のような問題提起を行なっている。すなわち、教祖は社会・文化・構造の周縁において、人間と神との間に立ち、人間を解放と救済に導くものである。そのような教祖の自己表現である『金光大神御覚書』と『お知らせ事覚帳』が、社会・文化・構造の中に組み込まれ、それを支える金光教団を支えるものになっている、あるいはなくなってしまうのではないかという問題提起である。

島蘭と荒木の議論は、いずれも「救済宗教」としての、また「教団」としての金光教理解、ひいては新宗教理解にとって非常に重要な宗教学的問題を指摘したものである。ただし、島蘭と荒木が立論の根拠としているのが、主に教学研究者が自分自身の経験と『金光大神御覚書』の理解により構築した教祖像であり、またその結果として「四十二歳の大患」の事蹟を中心とした教祖理解であるということここでは指摘しておきたい^v。

すなわち、冒頭に安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟が記されている『お知らせ事覚帳』^{vi}の公開は、島蘭の研究の発表後であり、荒木の研究が発表されるのとはほぼ同時期の1983（昭和58）年であった。その後、『お知らせ事覚帳』の研究が進み、そして2015（平成27）年に新たな教祖関連資料が加わることになる。このような資料環境の変化によって、島蘭や荒木によって指摘されていた課題や問題に金光教学はどのように応えているのか、またそこに現れてきた教祖理解の特徴はどのようなものかを明らかにするのが本稿の課題である。

ところで、日本社会において「救済宗教」の低迷、「教団」に対する批判の高まりが指摘されて久しい^{vii}。本稿は、「救済宗教」としての、また「教団」としての金光教が、現代社会においてどのような課題に取り組もうとしているのかを、教学という側面から明らか

にすることにもなるであろう。

以下の論述においては、『金光大神御覚書』は「覚書」、『金光大神お知らせごと覚帳』は「覚帳」、『金光大神暦注略年譜』は「略年譜」、『金光大神年譜帳』は「年譜帳」、『金乃神様金子御さしむけ覚帳』は「さしむけ覚帳」、『御金神様御さしむけ金銭出入帳』は「出入帳」、『金光大神事蹟に関する研究資料(影印、読み下し文)』は「研究資料」と略記することとする。また、「覚書」、「覚帳」の引用には、『金光教教典』の章・節の番号を付している。資料の引用に際しては、適宜歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めている。

第一章「神の頼みはじめ」の事蹟への関心の高まり

本章では、2015年前後より金光教学において、従来大きな意義が認められてきた安政二年の「四十二歳の大患」の事蹟に加えて、安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟に大きな意義を認める、あるいは「四十二歳の大患」の事蹟よりも、むしろ「神の頼みはじめ」の事蹟の方により大きな意義を認めようとする傾向が顕著になっていることを教学研究者である大林浩治の二つの論考により確認する。また、そのような傾向がなぜ高まっているのかという問題について考察していくⁱⁱⁱ。

金光教教学研究所所長(2023年現在)の大林浩治は、所長就任後の2015(平成27)年と2017(平成29)年に、赤沢文治において金銭(貨幣)と信心がどのように関わるのかをテーマとした論考を発表している^{iv}。

2015年の論考において、大林は「覚帳」には金銭に関する記述が多く含まれていること、またそもそも「覚帳」冒頭の安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟において神が文治の弟繁右衛門の「屋敷宅がえ」のために金銭の援助を依頼していることに着目する^v。そこから、大林は「神の頼みはじめ」の事蹟において金銭はいったいどのような意味をもっていたのか、またそれから十一年後の慶応三年にその出来事が「神の頼みはじめ」と神から知らされることになったのかはなぜなのかを問うていく。

弟繁右衛門に憑依した金神が兄の文治に建築費用の援助を依頼し、文治がそれを引き受けると神はしずまり、繁右衛門は意識を取り戻す。「神の頼みはじめ」の事蹟は、出来事としてはただこれだけのことである。しかし、そこには、建築のためのわずかばかりの金銭も借りることのできない繁右衛門個人の問題ばかりでなく、神が現れて文治に解決を求めざるをえないような大きな問題が現れていると大林は述べる。そして、その大きな問題こそ、「人間の意思を超えて人間を規定する経済^{vi}」の問題であり、また他者との関係のあり方や人間の諸活動を全面的に規定して抽象化する貨幣の問題である。文治は安政四年十月十三日に、意識的であったかどうかはともかく、このような問題に直面させられたのだと大林は言う。その後、文治は田畑耕作を離れて神勤に専念し、金銭のやりくりで生きていくことになり、そこで先に述べたような貨幣経済の問題性に直面していくことになる。そこに訪れた慶応三年の神のお知らせは、安政四年の出来事を「神の頼みはじめ」とするものであった。このような安政四年から慶応三年にいたる出来事から、貨幣の意味、神と人との関わりの意味について大林は、

神との関わりは、人間が互いに関わりあう際の本質的な

次元を見出させることを、貨幣をやりとりする現実世界に指し示すこととなっていた^{xii}。

と述べ、文治はそれに気づかされたと結論づけている。人間の意思を超えて人間を規定する貨幣であるが、同じく人間の意思を超えるが故に神との関わりすなわち信心には、貨幣経済を見返す作用が含まれるというのである。大林により、「神の頼みはじめ」の事蹟に、文治が世界のあり方、人間の関わりあいについて見返す契機になったという大きな意義が与えられていることが理解できるであろう。

一方、2017年の論考において、大林は2015年に教団に提供された資料に含まれる教祖直筆の三冊の帳面を用いている。一つ目は、表紙に「安政六年十二月」の日付とともに「金乃神様 金子御佐師 むけ 取かえむしん物万付覚帳」と記された帳面で、金銭貸借に関わる記録が綴られている^{xiii}。二つ目は、表紙中央に「御金神様 御さしむけ」と記された帳面で、表紙には他に「神の頼みはじめ」に関する記事があり、神号も記されている。本文には弟繁右衛門への普請入用、山伏による無心、京都吉田家免許状関係、献金など、金銭関係の記録が多く見られる^{xiv}。三つ目は、表紙がなく、文治の三男浅吉に関わる金銭関係の記録の他、金光大神の事蹟、参拝者に関する記録等、雑多な記事が綴じられた帳面である^{xv}。本稿では、これらの帳面をそれぞれ、2017年当時の金光教での名称に従い、「帳面1」、「帳面2」、「帳面4」と呼ぶこととする。

大林は、これらの資料を用いて、2015年の論考で確認された、神との関わりすなわち信心には、貨幣経済を見返す作用が含まれているということ、社会関係、人間関係において「信じる」ことの価値とはどのようなものか、またその価値はどのように見出されるのかという問題として考察していく。具体的には、弟繁右衛門に対する援助、広前奉仕に関わる金銭の問題、奉献金による金銭の融通や山伏らの無心に応じる様子、三男浅吉の博打による借金、宮建築に関わる棟梁らの横領問題が検討の対象とされている。

このうちで「神の頼みはじめ」の事蹟に直接関連するのは、広前奉仕に関わる金銭の問題であり、弟繁右衛門への金銭の援助の内容が「帳面2」により具体的に検討されている。そこで大林は、「帳面2」一丁表冒頭にある「金神様おかげのはじめ」、同じく一丁表にある「普請入用神様よりたのまれ」の箇所注目し、そこから建築に関わる金銭の支出が、文治には人間の意思を超えた神の働きとして捉えられ、神との関係において問題になっていると述べる。

金銭を通じた神と文治との関係について、このような考察を詳細に行った上で、大林は「おわりに」で次のように述べる。

ここまで本稿は、安政四年の弟への金銭援助を頼まれた出来事を起点として神との関わりが見返され、それが「信じること」や、神との関わりを生きる問題として、信心の価値見定めへ促されていったようすを、金銭さしむけを通じて文治に見てきたことになる^{xvi}。(傍点、長崎)

本稿の問題関心からは、2017年の論考は2015年の論考とは異なり、安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟ばかりでなく、金銭を通じて文治が神や人との関わりについての本質的な問題に直面させられるという、文治の信心にとって重大な一連の出来事の起点に安政

四年の「神の頼みはじめ」の事蹟が位置づけられていることを確認しておきたい。文治の信心にとって安政四年の「神の頼みはじめ」が本質的に重要な転機であると大林が意義づけていることを確認しておきたいわけである。

そのことをあらためて確認するように、大林は「おわりに」で、「帳面4」一丁表の「神の頼みはじめ」について記された箇所、安政四年の出来事を「信心はじめ」と記されていることに注目する。同じ安政四年の出来事が、慶応三年起筆と考えられている「覚帳」では「神の頼みはじめ」、表紙に慶応四年の日付のある「帳面2」では「金神様おかげのはじめ」とあることから、文治によって「安政四年の出来事はさまざまに意味付けされたことがわかる」^{xvii}と述べ、「神の頼みはじめ」が文治の信心にとってさまざまな意味を有することを確認している。

ここまで、大林浩治の2015年と2017年の二つの論考により、大林が安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟に文治の信心にとって大きな意義を認めようとしていることを確認してきた。大林は、文治の信心は安政四年の出来事を境目にして質的に大きく転換していると理解している。そして、「神の頼みはじめ」の事蹟と、それ以前の「四十二歳の大患」の事蹟との関係が問われることはない。このような大林の理解は、安政二年の「四十二歳の大患」を境目にして質的に大きな転換があったとする従来の理解と大きく異なるものであると言える。

さて、ここからは、2015年前後から、従来大きな意義が認められてきた安政二年の「四十二歳の大患」の事蹟に加えて、安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟に大きな意義を認める、あるいは「四十二歳の大患」の事蹟よりも、むしろ「神の頼みはじめ」の事蹟の方により大きな意義を認めようとする傾向が顕著になってきているのはなぜかを考察していく。理由は二つある。一つは、文治研究の資料環境の変化であり、もう一つは、「四十二歳の大患」の事蹟による教祖理解に対する批判の高まりである。

資料環境の変化から見ていきたい。金光教の教祖理解の歴史を資料環境という観点から眺めると、およそ次の三つの時期に区分できる。はじめは、1983（昭和58）年に制定された『金光教教典』に教祖直筆の「覚帳」が収められて公開されるまでの時期で、もっぱら文治の五男宅吉による筆写本である「覚書」^{xviii}により教祖理解が試みられた（第1期とする）。次は、「覚帳」が公開され、「覚書」と「覚帳」によって教祖理解が試みられた時期（第2期とする）、そして2015（平成27）に教団に提供された教祖関連資料が「覚書」と「覚帳」に加わって以降の時期である（第3期とする）。

第1期においては、教祖理解をするのに基本的には「覚書」によるほかはなかった。そして、この時期においては文治と神との関わりにおいて「四十二歳の大患」が大きな意義を有するとする教祖理解が多くみられた^{xix}。

ところで、「覚書」の起筆は明治七年旧十月十五日と考えられるようになるが^{xx}、それはその後公開されたどの資料の起筆よりも遅い^{xxi}。また、第2期において「覚書」と「覚帳」の基礎的研究が進展したことにより、「覚書」に記されている文治の前半生は後年の回想によるものであり、明治期以降の文治の立場が反映されていることも明らかになってくる^{xxii}。そうしたことから、第2期以降「覚書」を資料として文治を理解するのに慎重な態度が広がった。

また、「四十二歳の大患」の事蹟の記事は、第2期以降に公開された資料のうち「年譜帳」にしかないが、一方第2期と第3期に公開された資料の多くには、安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟が記されている。もちろん、それは「覚書」にも記されているが、「覚書」以外の資料では、その事蹟が他の事蹟とは異なる特別な意味づけを与えられているかのような記され方になっている。その一部は、先に紹介した大林の論稿でもふれられているが、ここであらためて整理してみたい。

まず、「覚帳」は本文冒頭に安政四年十月十三日の出来事が記され、一連の出来事の最後に「おかげ受け」、また慶応三年にそれについて「神の願いはじめ」と言及する神のお知らせが記されている。「年譜帳」の六十三丁裏^{xxiii}にある「年譜帳」の起筆を促す明治四年十二月の神のお知らせの中には、「御蔭を知り。／安政四丁巳十月十三日。」「心神（信心）はじめより当年で十五年に相成り候、以上。^{xxiv}」と記されている。「略年譜」では、五丁裏に「同戊午金乃神 御蔭下され候」とある。「出入帳」では、表紙に安政四年十月十三日の出来事が記され、一丁表にもその出来事の詳細が記され、その後金銭の援助の詳細も記されている。最後に、「手控え綴」の一丁表と二丁表は、「年譜帳」一丁表と類似した紙面になっている。

要するに、資料環境の変化により、「覚書」と「四十二歳の大患」の事蹟に対する慎重な態度が高まる一方で、「神の頼みはじめ」の事蹟に対する関心が高まってきたわけである。

以上、文治研究の資料環境の変化という理由について見てきた。続いて、「四十二歳の大患」の事蹟による教祖理解に対する批判の高まりという理由について検討する。

周知のように、金光教は研究者から「近代的宗教」との評価を受け^{xxv}、そして教団側もそのように自己理解をしてきた歴史がある。たとえば、1972（昭和47）年の『概説金光教』の次のような箇所にはそれが典型的に表れている。

教祖は、こうした習俗的な民間信仰のなかに生まれ、育ち、しだいにそれをのりこえて、独自の宗教的境地をひらいていったのであるが、その信境展開の契機となったのは、四十二才のおりの大患であった。（中略）凡夫としての人間自覚に立ち、実意に実意をこめた生き方をもって神に心をよせてきた教祖に対し、ついに、神がその真のすがたをあらわしはじめたのである。そこでは、神はもはや、人間にたたりさわりをする習俗的な信仰の神ではなく、人間を助け生かす神であった^{xxvi}。

このような「呪術から解放」された「内面的信仰」を特徴とする「近代的宗教」としての金光教という理解を支えてきたのが、上の引用にもあるように、「四十二歳の大患」の事蹟の解釈であった。この出来事により、文治は日柄方位の俗信と悪神「金神」から解放され、人間を助け生かす「天地金乃神」への内面的信仰をもつにいたったと解釈されてきたわけである。

このような解釈は、20世紀最後の四半世紀以降、近代批判、宗教概念論といった様々な立場から批判され、金光教学内でも批判されるようになる。ここでは、そのような批判の例を、教学研究で

ある白石淳平の論考で見てみたい。

白石は、2021年に発表した論考^{xxvii}において、金光教学における従来の神解釈について、文治と金神との関わりが、金光教団を前提とした上で乗り越えられるべきものとして把握されてきたと批判する。そして、新たな資料環境(本稿でいう第3期)のもとで、文治の信仰世界像の全体性を求めるために、文治が明治六年の改暦と関わり金神をどのように把握していったかを探求する。そこから白石は、文治と関わる神が、金神から天地金乃神へと変化していくにしても、それは悪神が福神になるといった単線的な神表象の変化ではなく、「複数ので重層的な神との関わりの模索に、「金神」への信心の視界それ自体が問い直され、新たに開かれていった」^{xxviii}のような変化であったと結論づける。

そして、白石は、文治の「複数ので重層的な神との関わりの模索」という観点から、やはり安政四年十月十三日の出来事についての記事に注目している。「覚帳」と「年譜帳」が、どちらも金神との出会いである安政四年十月十三日を起点としており、そこに神との関わりの全体を浮かばせる複数の重層的な神表象が見られるという。また、「覚帳」ではそれを「おかげ受け」、「年譜帳」では「お陰を知り」とあり、そこに人間の立場として受動性と能動性の相違があることに、神的次元と人間的次元の落差と同時に、それを架橋する信心の営みの可能性が示されているのではないかと白石は問うている。

ここでは、白石が、「四十二歳の大患」の事蹟に金神から天地金乃神への変化を把握してきた従来の教祖理解を批判し、新たな資料環境のもとで安政四年の出来事へと関心を向けていくようになっていくことを確認しておきたい。

第二章 人間教祖論の現在

前章では、2015年前後から今日までの金光教の教学研究の動向として、安政六年の「立教神伝」にいたるまでの文治と神との関わりを理解する際、従来大きな意義が認められてきた安政二年の「四十二歳の大患」の事蹟に加えて、安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟に大きな意義を認める、あるいは「四十二歳の大患」の事蹟よりも、むしろ「神の頼みはじめ」の事蹟の方により大きな意義を認めようとする傾向が顕著になっていることを指摘し、またそのような傾向が顕著になってきた理由について考察してきた。

資料環境の変化、従来の教祖理解の近代主義的偏向を修正していくという意味においては、2015年前後からの教学研究は妥当な歩みを進めているように見える。ただ、ここでは、「四十二歳の大患」の事蹟から「神の頼みはじめ」の事蹟への関心の移動が教祖理解・教祖像にとってどのような意味をもつのかをあらためて問うてみたい。

そこで、まずは島蘭進と荒木美智雄の議論を参照しながら問いを明確にしていきたい。

島蘭は、新宗教の発生という問題の中で、金光教学の教祖理解に論究している^{xxix}。それによれば、日本の新宗教は民間信仰ではなく民俗宗教を発生基盤とするが、生神思想すなわち教祖が神に選ばれた唯一の媒介者であるという観念の有無に民俗宗教と新宗教の決定的な違いがある。金光教においては、生神思想は希薄になりつつも、戦前までは保たれていた。ところが、戦後教学では、学問的な立場から教祖を一人の人間として共感的に理解しようとする人間

教祖論の立場が優勢になり、生神思想が失われ、教祖は救済者としてではなく、信徒の模範となる信仰者として理解されるようになる。人間教祖論では、「四十二歳の大患」の事蹟は、救済の起点ではなく、信心の起点と捉えられるようになり、その結果、超越性と救いの根拠・起源が失われ、人間中心主義・倫理主義が残ったという。

金光教の戦後教学について島蘭が指摘しているのと同じ問題を、宗教学者で金光教教師でもあった荒木美智雄は文治の宗教的自叙伝をめぐる研究の中で指摘している。荒木は、「覚書」と「覚帳」を、社会・文化の構造の周縁に立ち、人間を救済に導く存在の自己表現であるという^{xxx}。ところが、それが『金光教教典』の最重要部分と受け止められることにより、教祖の周縁性は失われ、むしろ社会・文化の構造を支える金光教団を支えるものになることを指摘し、戦後教学の成果を厳しく批判している^{xxxi}。

島蘭によれば、昭和39年頃からは、このような戦後教学からの脱皮が自覚的に図られ、超越性の回復が試みられるようになる。ここでは「四十二歳の大患」の事蹟に、神の超越性の確認という新たな観点が加わるが、そこに浮かびあがる教祖像は一人の思想者であり、やはり救済者ではない。超越性と対峙して自己の内面を凝視する思想者という教祖像では、救済の起源を説明することができていないと島蘭はいう。

要するに、戦後の金光教学では、さまざまな理由により^{xxxii}、教祖が神に選ばれた唯一の媒介者であるという生神思想が希薄化している、あるいは失われており、そのことによりなぜ救済が可能なのかという救済宗教の核心に関わる問いへの答えが出せなくなってしまっているということである。

このように見てくると、現代の教学研究に対する問いは次の二つになるだろう。一つは、2015年前後から「神の頼みはじめ」の事蹟に高い関心を寄せるようになっていく教学研究に浮かんてくる教祖理解、教祖像はどのようなものなのだろうかという問いである。そしてもう一つは、その教祖理解、教祖像は金光教団を支えるものになっていないか、あるいは金光教の信心の独自性を主張するための教祖理解になっていないかという問いである。このような問いに金光教学がどのように応えているかを、大林の議論で検討していこう。

現代の金光教の教学研究をになう大林が、戦後の金光教学に一貫している人間教祖論の立場にあることは間違いない。たとえば、大林が「神の頼みはじめ」の事蹟において貨幣の意味とは何かと問い、

もちろんそこでの現実社会における人間は、貨幣によって全面的に規定されている。人間は貨幣によってさまざまなモノを手に入れ、そうして生きているというように。しかし全面的に規定する、まさにそここのところで、貨幣はモノしか買えないという限界を有していることも事実なのである。文治が受けとめていったのはこの事実である^{xxxiii}。

と述べるとき、文治が一人の人間として把握されていることは明らかである。

また、安政四年の出来事を「神の頼みはじめ」と捉える慶應四年の神のお知らせについて、

告げられた内容も重要なのだが、ここで注目したいのは、それほど大きな働きの中に文治もあずかって世の人を安心の道に導いているという、そのことを文治が真に感得したということである。そのような受けとめとして「日天四の下に住み、人間は神の氏子」という言葉も聞かれているのであり、それによって文治自身も「神の氏子」とされる人間の一人に過ぎないという了解へ導かれるのである^{xxxiv}。

と述べる時、文治自身から教祖をひとりの人間として理解することを要請されていると大林は理解しているだろう。

このように人間教祖論の立場にある大林であるが、人間中心主義、倫理主義の立場ではないことも確かである。というのも、貨幣の問題を通して、文治が神との関係、人間との関係の問題に直面させられたと捉えられるとき、神は貨幣と同様、人間の意思を超えた存在として把握されている。その意味において、神という超越性の確認が、文治と神との関係に捉えられている。

要するに、大林に代表される現代の教学研究は、島薗が指摘した昭和39年頃から始まる超越性を回復しようとする教学の流れに位置すると考えてよい。

では、「神の頼みはじめ」の事蹟への関心の高まりは、どのような意味をもつであろうか。この問いに答えるのに、まず確認しなければならないのは、これまで人間教祖論は、そこに救済の起点を見るにせよ、文治の信心の起点を見るにせよ、「四十二歳の大患」の事蹟の解釈が焦点となってきたということである。「覚帳」が公開される1983（昭和58）年以前は、「覚書」によるしかなかったとはいえ、「覚書」には「四十二歳の大患」の事蹟と「神の頼みはじめ」の事蹟がどちらも記されていた。その中で、「四十二歳の大患」の事蹟が人間教祖論の焦点になってきたのである。それに対して、2015年前後からの人間教祖論では、「四十二歳の大患」の事蹟ではなく、「神の頼みはじめ」の事蹟の解釈が焦点となっていることはすでに見てきた通りである。

「四十二歳の大患」の事蹟と、「神の頼みはじめ」の事蹟との決定的な相違は、前者は生神思想すなわち教祖が神に選ばれた唯一の媒介者であるという観念と結びつきやすいという点であろう。この観念には、教祖が神に選ばれた時の前後で歴史が二分されるという観念が含まれる。その観念と、身の回りに次々と不幸が訪れ、四十二歳の厄年に文治自らも病になり、その中で神と出会うという「四十二歳の大患」の事蹟とが相性が良いことは間違いない。安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟より前には安政二年の「四十二歳の大患」の事蹟があるということも重要であろう。

大林の議論には、「神の頼みはじめ」の事蹟によって、金光教にとってもっとも重要な救済財である取次を説明しているところがある。それは、安政四年の出来事を「神の頼みはじめ」と知らせる慶応三年のお知らせの解釈の部分である。引用してみよう。

社会の秩序構造に触れあいながら、神と人間とが現実社

会に向けて関わり合い、了解づけあっていく。そこから、金銭のやりとり（貨幣経済）の中で人間の本質的な意味を浮き上がらせる働きが生み出される。お知らせは、このような神との関わりのかたちを具体化した取次が、経済的基盤の歴史的変動を見せる現実社会のただ中でものごとを見させる働きを持つのだと告げていたのである^{xxxv}。

大林は、人間の諸活動を抽象化する貨幣経済の中で、文治に人間の本質的な意味に気づかせることになった安政四年以来の神との関わりに、文治が安政六年の立教神伝により専念する取次の意味を把握している。

たしかに「神の頼みはじめ」の事蹟により、取次の意味を把握することは可能であるし、正当でもあろう。しかし、「神の頼みはじめ」の事蹟による取次の意味の把握では、なぜ文治が取次にあたるのかという疑問に答えることはできないであろう。「神の頼みはじめ」の事蹟は、神によってすでに選ばれた文治に、神が頼みはじめた出来事なのではないだろうか。

このように見てくると、2015年前後より盛んになった「神の頼みはじめ」の事蹟を焦点とした人間教祖論に浮かんでくる教祖理解、教祖像はやはり救済者としてのそれではない。むしろ、「神の頼みはじめ」の事蹟に関連して把握される教祖像は、模範となる信仰者に近いものであろう。そのような教祖像は、はたして人間を解放、救済に導くものなのか、それとも金光教団を支えるものなのか。答えは自ずと明らかであろう。

おわりに

本稿では、2015年前後から金光教の教学研究において、「神の頼みはじめ」の事蹟に大きな意義を認めようとする動向が顕著になってきたことを指摘し、なぜそのような動向が高まってきたのか、またそのような動向の高まりは、教祖理解、教祖像にとってどのような意味をもつのかを論じてきた。

そこから見えてきたのは、資料環境の変化や学界の動向、時代思潮との関係で進展する金光教学のあり方である。もちろん、戦後から今日までの金光教学には、教祖をひとりの人間として理解する人間教祖論の立場が一貫していることを否定するわけではないが、人間教祖論の立場は、その客観性・実証性を重んじる傾向のゆえに、やはり資料環境の変化や学界の動向に影響されてきたことも否定できない。

教学研究所の現所長である大林浩治の、21世紀の人間を翻弄する経済の問題を見据えた業績などは、人間教祖論の立場によりはじめて可能になったものであろう。というのは、文治をひとりの人間として理解することにより、21世紀に生きるわれわれと文治を、ともに経済に翻弄される人間として把握する視界が開けてくるからである。その上で、信心が文治に人間のあり方を根源的に問わしめることになったとすれば、それは現代に生きるわれわれにとって信心がもつ可能性を示すことになる。このように、人間教祖論には、文治とは生きた時代・社会が異なる人間の問題を、文治を通して問うことを可能にするという大きな利点がある。

しかし、その代償として、人間教祖論により、「救済宗教」とし

ての金光教の基盤が揺らぐことになったことが指摘されてきた。生神思想を希薄化させるという側面である。文治が神により唯一選ばれた教祖であるという観念が希薄化することにより、金光教の救済財はその根拠を失ってしまうわけである。本稿において指摘したのは、2015年前後からその傾向が顕著になったということである。

誤解のないように述べておくと、本稿の意図は、現代の金光教学、金光教を批判することにはなく、むしろ「救済宗教」、「教団」としての金光教の現在を理解することにある。つまり、「救済宗教」として現代のどのような課題に向き合おうとしているのか、また「教団」としてどのような困難を抱えているのか、それについて教学を通して理解したいのである。

本稿で示した現代の金光教は、救済力を失った「救済宗教」、教祖をその支えとする「教団」と見えたかもしれない。しかし、それは「救済宗教」、「教団」とは異なる新たな宗教のあり方の胎動かもしれない。

註

ⁱ 金光教の教祖である金光大神の名前は、生まれた時の「香取源七」から、養子縁組により「川手文治郎」、領主と同じ名前が禁じられたことにより「川手国太郎」、養父の命により川手姓を元の赤沢姓に戻し「赤沢国太郎」、国太郎を元の名に戻して「赤沢文治」、また信仰の進展にともない「金光大陣」、「金光大神」と変わってゆく。本稿においては、のちに金光教の教祖になる人間という意味で「赤沢文治」という名前を用いることにする。

ⁱⁱ 「此方のように実意丁寧神信心いたしおる氏子が、世間になんほうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ。／(原文改行、以下同様) 神も助かり、氏子も立ち行き。氏子あつての神、神あつての氏子、末々繁盛いたし、親にかかり子にかかり、あいよかけよで立ち行き、とお知らせ。」(『覚書』9-10)。

ⁱⁱⁱ 「四十二歳の大患」の事蹟は次のようなものである。「四月二十五日ばんに気分悪し。二十六日病氣増し。医師服薬、祈念、神仏願ひ、病気のどけに相成り。もの言われず、手まねいたし、湯水通らず。九死一生と申し。／私は心実正、神仏へ身任せ。家内に、外へ出て仕事いたせと手まねいたし。／身内みな来て、小麦打ち、てごしてくだされ。小麦打ちやめて心配、とてもいけんと、もの案じ。宇之丞を育てにやよかったにのう。死なれてはつらいものじゃと、みな思案いたし。仕事どころかと申し。／それでも、なんでも早うにかたづけて、神様願うよりしかたなし。親類寄って、神々、石鎚様、祈念願ひ申しあげ。／新家治郎子の年へおさがりあり。普請わたましにつき、豹尾、金神へ無礼いたし、お知らせ。／妻の父が、当家において金神様おさわりはないと申し、方角を見て建てたと申し。／そんなら、方角見て建てたら、この家は滅亡になりても、亭主は死んでも大事ないか、と仰せられ。／私びっくり仕り、なんたこと言われるじゃろうかとも思い。／私がもの言われだし、寢座にてお断り申しあげ。ただいま氏子の申したは、なんにも知らず申し。／私戌の年、年回り悪し、ならんところを方角見てもらい、何月何日と申して建てましたから、狭い家を大家に仕り、どの方角へご無礼仕り候、凡夫で相わからず。／方角見てすんだとは私は思いません。以後無礼のところ、お断り申しあげ。／戌の年はよい。ここへ這い這いも

出て来い、と。／今言うた氏子の心得ちがい、其方は行き届。正月朔日に、氏神広前まいり来て、どのように手を合わせて頼んだら。氏神はじめ神々は、みなこへ来とるぞ。／ここまで書いてから、おのずと悲しゅうに相成り候。／金光大神、其方の悲しいのでなし。神ほとけ、天地金乃神、歌人なら歌なりとも詠むに、神ほとけには口もなし。うれしいやら悲しいやら。／どうしてこういうことができたじゃろうかと思ひ、氏子が助かり、神が助かることになり、思うて神仏悲しゅうなりたの。／また元の書き口を書けい。／神々みな来ておるぞ。戌の年、当年四十二歳、厄年。厄負けいたさずように御願ひ申しあげと願ひ。／戌年男は熱病の番てい。熱病では助からんで、のどけにまつりかえてやり。心徳をもって神が助けてやる。／吉備津宮日供二度のおどうじあり、もの案じいたしてもどろうが。病気の知らせいたし。信心せねば厄負けの年。／五月朔日験をやる。金神、神々へ、礼に心経百卷今夕にあげ、とお知らせ。／石鎚へ、妻に、衣装着かえて、七日のごちそう、香、灯明いたし、お広前五穀お供えあげ。／日天四が、戌の年、頭の上を、昼の九つには日々舞うて通ってやりおるぞ。戌年、戌の年一代まめで米を食わしてやるぞ、とうえの五郎右衛門口で言わせなされ。／持つとる幣が、五穀の上、へぎの上、手をひきつけ、幣に大豆と米とがついてあがり。／盆を受け、これを戌年に、かゆに炊いて食わせい、と仰せつけられ候。／しだいによし。五月四日には起きてちまきを結い、ご節句安心祝ひ。おいおい全快仕り、ありがたし仕合わせに存じ奉り候。／安政二乙卯五月、四十二歳。同じく四月二十九日夜、願ひすみ。」(『覚書』3-4~3-8)。

^{iv} 島蘭進「生神思想論—新宗教による民俗〈宗教〉の止揚について—」(宗教社会学研究会編『現代宗教への視角』雄山閣、1978年、所収)。同「金光教学と人間教祖論—金光教の発生序説—」(『筑波大学思想学系論集』4、1979年、所収)。荒木美智雄「周縁と新しい人間—金光教祖の場合—」(『思想の科学』124、1980年、所収)。同「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』と『お知らせ事覚帳』—その宗教学的意味について—」(『金光教学』23、1983年、所収)。

^v たとえば、島蘭は「しかし、金光教学の成果は人間教祖論に限ってみてもかなりの量にのまり、その全体を総覧することは容易ではなく、またさしあたって不可欠というわけでもない。そこで、ひとまず教学の流れを代表する数人の教学者を選び出すとともに、安政二年(一八五五)文治四二歳の大患体験をとりあげ、この事件に対する彼らの解釈を主たる検討の対象とすることにした。」(島蘭[1979]、101~102頁)、また「人間教祖論の展開をたどるさい、焦点としてこの体験を選ぶさしあたっての理由は、多くの人間教祖論において大患体験が重要な主題となってきたこと、この体験の解釈においてそれぞれの人間教祖論の特徴が典型的に現れること、などである。しかし、と同時に、私自身の関心にとっても、大患体験の解釈が赤沢文治像再構成の鍵となるだろう、という予想が含まれている。」(島蘭[1979]、102頁)と述べている。

^{vi} 安政四年の「神の頼みはじめ」の事蹟は「覚書」にも記されている。しかし、ここで重要なのは、それが「覚帳」の冒頭に記されているということである。

vii 宗教学者の岸本英夫は1955（昭和30）に発表した「人間と宗教」（岸本英夫、増谷文雄編『人間と宗教』中山書店、1955年、所収）の中で「現代社会の大空には、宗教の、宗教の弔鐘が響きわたっていると感じている人が多い。それは、宗教が、人の死をとむらう鐘の音ではない。現代社会が、宗教の終焉をとむらうかの響きをもっている。」と述べ、既成宗教の「終焉」を指摘している。また、近年では、やはり宗教学者の島蘭進が、現代を「軸の時代」以来二千年にわたる救済宗教中心の宗教史から新霊性文化への転換点と捉えてみせた（島蘭進『精神世界のゆくえ 現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996）。

viii 本稿においては大林の二つの論考を取り上げたが、その他に「神の頼みはじめ」に注目した教学研究として、藤本拓也「お知らせ体験の深まりに見る宮建築の移ろい―「神の頼みはじめ」とその無起源性をめぐって―」（紀要『金光教学』第52号、2012年）と岩崎繁之「金光大神年譜帳」と類似資料との関わりについて―作成の順序とそこに浮かぶ諸相への注目―」（『金光教学』第60号、2020年）を挙げることができる。岩崎は、その中で「「覚帳」起筆時点（慶応三年末～明治元年頃）と、「年譜帳＝原本」の起筆時点と見られる明治四年一二月において、金光大神がどちらも安政四年十月一三日の出来事を神との出会い、信心のはじまりと捉えている点には、改めて注目させられる」（135頁）と述べている。

ix 大林浩治「「神の頼みはじめ」における貨幣―貨幣経済へ向けた神と人との関わり―」（『金光教学』第55号、2015年）。同「「金銭遣い」の世における信心―金銭さしむけに関する帳面をもとにして―」（『金光教学』第57号、2017年）。

x 「神の頼みはじめ」の事蹟は次のようなものである。「安政四丁巳十月十三日暮れ六つ時、亀山村より人が出。弟繁右衛門気がちがい、金神様お乗り移りと申して乱心のごとく、早う大谷へ行って、兄の文治戌の年を呼んで来てくれと申され候。早うに来てくだされ候。／私早々まいり。身内、親類、村内懇意な人待ち受け。ようござりた、なにぶん苗に稗にもなりて、どうぞ治まるように願いますと申し候。／私、同人所へ、前まいり。戌年、よう来てくれた。金神頼むことあって呼びにやった。金神言うこと聞いてくれるか。／私根にかなうことなら、承知仕り候。／別儀ではない。この度、此方末年、よんどころなく屋敷宅がえにて、十匁の銭借る所なし。普請入用金神が頼む。／私してあげましようとしあげ。／それで神もくつろいだ。総方も一日大儀、開きくだされ。庄屋ご寮人を、若い人お供して行っくだされ候。神が頼む。／またあとで、おいさみあり。おしずまり願ひ。しずまりてやると申して、お棚へとびつき、そのままにこけ寝入り。／親類の者、本心と思わず、祈念祈祷の評議いたし。／夜も明け、同人も目を覚まし、元の本心に相成り候。／昨日のことみな覚えておるかとお申したずね、なんにも知らんと申し候。覚えんと申せばいたしかたもなし。妻なりとも総方へ悪いところは断り申し、お礼回らせ。おって村お役場お礼まいり、それから普請にかかるがよしと申しおき、私ひきとり。十四日。」「（「覚書」4-1）。

慶應三年の神からのお知らせ「氏子の難なし、安心の道教え、いよいよ当年までで神の頼みはじめから十一か年に相成り候。」（「覚書」15-8）にある「神の頼みはじめ」がこの出来事にあたると考えられている。

xi 大林 [2015]、19頁。

xii 大林 [2015]、32頁。

xiii 岩崎繁之「金光大神の事蹟に関する資料（帳面上の体裁をとったもの）の概要」（『金光教学』第56号、2016年）、61頁。この帳面は、その後「金乃神様金子御さしむけ覚帳」と名付けられ、『金光教学』（第60号、2020年）で解読文とともに公開された。

xiv 岩崎 [2016]、62頁。この帳面は、その後「御金神様御さしむけ金銭出入帳」と名付けられ、『金光教学』（第61号、2021年）で解読文とともに公開された。

xv 岩崎 [2016]、63～64頁。この帳面は、その後「手控え綴」と名付けられ、その一部が『金光教学』（第60号、2020年）で公開された。

xvi 大林 [2017]、44～45頁。

xvii 同上、45頁。

xviii 戦前にはその存在が金光教団の一部の者にしか知られていなかった「覚書」が広く知られるようになったのは、教祖伝公刊の気運が高まったことによる。1947（昭和22）年6月に教祖伝記奉修所が設置され、「覚書」が教祖の事蹟に関する根本典籍と定められた。そして、「覚書」を基礎的資料とした教団初の教祖伝公刊へ向けての作業が重ねられてゆき、昭和28（1953）年に教祖伝『金光大神』が刊行される。

xix 「四十二歳の大患」の事蹟の記事は、「年譜帳」と「覚書」にあるが、安政四年の事蹟から始まる「覚帳」にはない。つまり、2019年に「年譜帳」が「研究資料」に収められて公刊されるまでは、「覚書」にしかなかったわけである。筆者は、「研究資料」公刊後に、「年譜帳」と「覚書」の「四十二歳の大患」の事蹟の記事を比較検討した。そこで明らかになったのは、両者には量と質両方において大きな差があるということであった。そこからは、確かに「覚書」は文治の後年の立場が反映されているという解釈の一定の妥当性は確認できるのだが、しかし、そのことと教祖理解の問題との関係は、慎重に検討しなければならない別の問題であると思われる。長崎誠人『「金光大神御覚書」の解釈学の問題―「想起」をめぐって―』（『叡山学院紀要』45号、2023年、所収）、参照。

xx 明治七年旧十月十五日のお知らせ「十月十五日早々お知らせ。一つ、此方一場立て、金光大神産まれ時、親の言い伝え、此方へ来てからのこと、覚え、前後とも書き出し。」（「覚書」22-10）によって起筆されたと考えられている。

xxi 「覚書」以外の主な資料の現時点で想定されている起筆時期を示すと、「覚帳」は慶応三年（推定）、「年譜帳」は明治四年十二月、「暦注略年譜」は明治六年前後（推定）、「さしむけ覚帳」は安政六年、「出入帳」は慶応四年となっている。

xxii 竹部弘「「覚書」における金光大神前半生と天地金乃神」（『金光教学』34、1994年、所収）。

xxiii 「年譜帳」は、「宅吉筆写帳面」の一部であり、六十三丁から始まっている。

xxiv 西暦に直すと明治四年は1871年で、安政四（1857）年からちょうど十五年目にあたる。

xxv 村上重良『近代民衆宗教史の研究』（法蔵館、昭和38年）が代表的である。

- ^{xxvi} 金光教本部教庁編『概説金光教』金光教本部教庁、昭和47年、7～8頁。
- ^{xxvii} 白石淳平「明治改暦と「金神」—金光大神における神把握をめぐる—」(『金光教学』61号、2021年、所収)。
- ^{xxviii} 同上、91頁。
- ^{xxix} 島藺 [1978]、[1979]。
- ^{xxx} 荒木 [1983]、1～2頁。
- ^{xxxi} 「金光教の場合、教祖自身の執筆になる宗教的自叙伝を手にしながら、その宗教的自叙伝を「御手記」あるいは「根本典籍」とすることによって戦後の御伝記『金光大神』のように、客観主義的・分析的な「聖伝」の中に教祖の内面性を拡散させたり、『概説金光教』の教祖像のように、ただただ抽象的な、直接性・具体性を奪われ、美しく整った、また、それ故に救済力を奪われた聖者を描くことになってきている。このことは、金光大神の執筆になる「宗教的自叙伝」を「宗教的自叙伝」として把握せず、「聖伝」の一類型として扱うこと、あるいは、古き構造の中に教祖自身を解消してしまうことに起因するものではないであろうか。」(荒木 [1983]、17頁)。
- ^{xxxii} 島藺は、歴史的認識の浸透と、天皇制イデオロギーの影響を理由として挙げている。前者についてだけ触れておくと、学者やジャーナリストによる客観的相対的な研究に教学研究者が影響されるということと、教義整備や教祖像の探究への願いにより、実証的な知識が増えていく(島藺 [1978]、47～48頁)。
- ^{xxxiii} 大林 [2015]、32頁。
- ^{xxxiv} 同上、30頁。
- ^{xxxv} 同上、32頁。

主要参考文献

- 大林浩治「「神の頼みはじめ」における貨幣—貨幣経済へ向けた神と人との関わり—」(『金光教学』第55号、2015年)。
- 大林浩治「「金銭遣い」の世における信心—金銭さしむけに関する帳面をもとにして—」(『金光教学』第57号、2017年)。
- 島藺進「生神思想論—新宗教による民俗〈宗教〉の止揚について—」(宗教社会学研究会編『現代宗教への視角』雄山閣、1978年、所収)。
- 島藺進「金光教学と人間教祖論—金光教の発生序説—」(『筑波大学思想学系論集』4、1979年、所収)。
- 島藺進『現代救済宗教論』青弓社、1992年。
- 島藺進『精神世界のゆくえ 現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996年。
- 荒木美智雄「周縁と新しい人間—金光教祖の場合—」(『思想の科学』124、1980年、所収)。
- 荒木美智雄「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』と『お知らせ事覚帳』—その宗教学的意味について—」(『金光教学』23、1983年、所収)。
- 岩崎繁之「金光大神の事蹟に関する資料(帳面上の体裁をとったもの)の概要」(『金光教学』第56号、2016年)。
- 白石淳平「明治改暦と「金神」—金光大神における神把握をめぐる—」(『金光教学』61号、2021年、所収)。
- 長崎誠人「『金光大神御覚書』の解釈学的問題—「想起」をめぐる

- て—」(『叡山学院紀要』45号、2023年、所収)。
- 村上重良『近代民衆宗教史の研究』法蔵館、昭和38年。
- 金光教本部教庁編『概説金光教』金光教本部教庁、昭和47年。
- Bellah, Religious Evolution, American Sociological Review Vol.29, No.3(1964).
- リクール『フロイトを読む』(久米博訳) 誠信書房、1982年。
- リクール『隠喩論 宗教的言語の解釈学』(麻生建／三浦國泰訳) ヨルダン社、1987年。
- フロイト『夢解釈Ⅰ』(『フロイト全集』4、新宮一成訳)、岩波書店、2007年。
- フロイト『夢解釈Ⅱ』(『フロイト全集』5、新宮一成訳)、岩波書店、2011年。